

矢印ナッジが就学前児の不正行為に与える影響

大石 淳一

不正行為は人間の生活にみられる普遍的な行為である。不正行為はあらゆる場面で発生するが、時に悪質な結果をもたらす。不正行為を規定する要因は、個人要因と状況要因に大別される。個人要因に基づく不正行為に関しては、状況横断的な一貫性のある証拠は示されていない。これに対し、状況要因に基づく不正行為に関しては、特定の状況下に置かれることで個人の不正行為が抑制・促進されることが先行研究において示されてきた。ただし、状況要因に対してどのような介入を施すことが不正行為の抑制や促進に影響を与えるかについては特定されなかった。

不正行為は子どもでも見られることが報告されている。発達心理学の領域では、選択を禁じることも経済的なインセンティブを大きく変えることもなく、人びとの行動を予測可能な方法で変化させる行動の手がかりであるナッジが、不正行為の抑制に有効であるか検証がなされている。約束や評判、物語を聞かせるといった言葉による明示的なナッジや、身の回りの物体や物体へのアクセシビリティといった物理的なナッジが就学前児の不正行為を抑制することが近年明らかにされてきた。また、ナッジは用途によっては意図せず望ましくない行動を促進するスラッジになる可能性も秘めている。

本研究では、日常的に目にする物理的なナッジとして矢印に着目する。矢印ナッジには人の注意を引きつける、あるいは行動を方向づける効果があるとされ、望ましい行動を誘発させることができるとされる。矢印の利用の仕方によって、矢印ナッジが望ましくない行動を抑制・促進する可能性があることを明らかにすることは、不正行為の防止に役立つ可能性がある。

本研究は年長児 66 名を対象とし、参加児は、最後の 1 問は成人でも時間内に答えることのできない難易度の高い問題を含む課題に取り組んだ。参加児の左側にはカンニングペーパーが設置され、問題用紙とカンニングペーパーの間には、図形が設置された。矢印図形が問題用紙の方向に向いたものを逆矢印条件、矢印図形がカンニングペーパーの方向に向いたものを順矢印条件、矢印を三角形と長方形に分解した図形を不規則に配置したものを統制条件とした。参加児は、カンニングペーパーを見てはいけないこと、答えを書き写してはいけないことを伝えられ、実験者のいない部屋で 5 分間問題に取り組んだ。

本研究では、物理的な環境である矢印ナッジが、教育場面における就学前児の不正行為にどのような影響を与えるのか検討することを目的とした。カンニングペーパーを見る不正行為をした児の割合（ルック率）については逆矢印条件で最も低く、順矢印条件では最も高く、統制条件ではその中間になり（仮説 1）、答えを書き写す不正行為をした児の割合（コピー率）についても逆矢印条件で最も低く、順矢印条件で最も高く、統制条件ではその中間になる（仮説 2）という仮説を検証した。

本研究で得られた結果を元にルック率について χ^2 検定を実施したところ、条件間でルック率に有意な差があることが示された。どの条件においてルック率に差があったかを明らかにするため、残差分析を実施したところ、順矢印条件においてのみのぞき見た児の人数が有意に多かった。このことから、矢印ナッジに答えを見るという不正行為を抑制する効果があることは示されなかったが、促進する効果があることは示された。一方、答えを書き写すコピー率について Fisher の正確確率検定を実施したところ、条件間で差は見られなかった。このことから、矢印ナッジと答えを写すという不正行為には関連が見られなかった。

本研究の結果は、矢印ナッジが望ましくない行動を誘発するスラッジになることを示唆するものである。また、不用意なナッジが望ましくない行動を導くことを防ぐという観点からも、矢印ナッジが就学前児の不正行為を促進するという知見は一定の意義がある。（比較発達心理学）